

雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

早春

小林貴子

光とふ一途なるもの庭乾く
風の日は風が父なり半仙戯
春昼や赤き砂漠に取る砂鉄
連翹の一花一花はみなりボン
三月や指を鳴らして立ち向ふ
木の芽時土偶が土を踏む力
流水に船八隻のはさまりぬ
春星座油滴天目茶碗かも
鉛筆にほのかな木目鳥の恋
目に光入れて検査や冴返る



虔

佐藤映二

雪の上曳かるる熊に日は落ちず
虔しみぶかく銃痕の熊捌く
幣辛夷雲は未完を愉しめる
海明けて噉は雪豹を放ちけり
ロダン作地獄の門や囀れり
朝寝して都会の海を漂へる

四季と折り合っ

佐藤映二

三月二十五日、東京上野で現代俳句協会総会が開催され、現代俳句大賞は柿本多映、安西篤が受賞された。宮坂会長より授与された賞状の文面より、その授賞理由を抜粋して紹介しよう。柿本氏は「生誕の地三井寺のある近江の風光と歴史を豊かな創造力により珠玉の作品にされ」「混迷する現代俳句界において（略）円熟の境地を示され」「多くの俳人の範となり勇気を与え続けてくださる」と。安西氏は「広く社会的視野を持たれ戦後俳句の担い手として句境を深め」「現代

俳句の断想」など俳句界全体を俯瞰する評論活動にも力を注がれ、論作両面にわたる「活躍が高く評価された。柿本氏は嬉しさを滲ませながら、人は出合いによって成長する」という仏詩人の言葉を引き、師と仰ぐ桂信子亡き後は一人で作句してきたことを淡々と語られた。また、「山姥は山に向ひておいお茶」の自句を挙げられ、当協会と「おいお茶」俳句運動との浅からぬ縁を裏書きされた。一方安西氏は、授賞式に先立ち協会七十周年事業の意義の深さと本賞受賞者への祝辞をのべた金子名誉会長を前に、第一回受賞者の兜太氏と同じ賞を受けるに至った因縁に触れ、深い感慨を露わにされた。